

田中 学：日本藻類学会第33回大会エクスカージョンに参加して

日本藻類学会第33回大会のエクスカージョンは、2009年3月29日に行われ、沖縄本島南部八重瀬町のシマチスジノリとカサノリ生育地の見学を行いました。当日は時折小雨が降る天気でしたが、幸い見学には支障ありませんでした。参加者は10時半頃泊埠頭の「とまりん」に集合し、防水された資料をいただき、沖縄総合事務局那覇港湾・空港整備事務所と八重瀬町の御厚意で用意して頂いたバス2台に分乗しました。30分程の移動中の車窓にはサトウキビ畑など沖縄独特の風景が見られました。

まず、シマチスジノリの生育地である屋富祖井に到着し、香村真徳先生より解説がありました。シマチスジノリは淡水産の紅藻で、かつては沖縄県各地の琉球石灰岩地一帯の湧水井戸（ムラガー）で生息が確認されましたが、近年は後背地の開発により環境が悪化し、生息地は減少の一途を辿っているそうです。今回の観察では透き通った湧水は見られましたが、数年前には見られたシマチスジノリの藻体は見付からず、水底にシアノバクテリア塊がありました。残念ながら、参加者は環境の悪化を目の当たりにすることになりました。

次に、カサノリの生育地である坂名城地区に向かいました。当日は大潮で、当地で「イザリ」と呼ばれる磯遊びを目当てに多くの人出がありました。一帯はサンゴ礁が発達し、広範囲に大小の自然のタイドプールや人工のプールが形成されていました。タイドプールをのぞくと水底一面に可憐なカサノリやリュウキュウガサ、ウスユキガサなどが揺らめき、その群落は緑と白の絨毯のようでした。想像以上の美しさで大変感動しました。参加者は配布された周辺の案内図や箱メガネを手に思い思いの散策をしました。私は沖縄の海は初体験であり、ズボンの裾をたくし上げ膝まで水に浸かって大はしゃぎしていたところ、参加記の執筆依頼をその場で受けることに

なりました。参加者の中にはカサノリを試食する猛者もおられました。主催者の方々が準備された真水で手足を洗い、少し移動すると、カサノリ生息地の目と鼻の先にゴルフ場が開発されており驚きました。

その後、八重瀬町役場の一室をお借りし、昼食を兼ねた懇談会が行われました。石川依久子先生からは、大会会場でのカサノリ特別展示にもあったように、カサノリ *Acetabularia ryukyuensis* は日本固有種であり、カサノリが石灰化を起さず鮮やかな緑色で近縁種に比べ大変美しいことや、数億年前から生存を続ける生き化石であることなどの解説がありました。坂名城地区のカサノリ生息地は時期的な消長が少なく、夏期でも観察でき貴重だそうです。参加者からは北海道がマリモならば沖縄県はカサノリをアピールすればよいといった提案など、カサノリの保全・啓蒙活動に関する意見が交換されました。また、カサノリの石灰化に関する熱い議論などで、大いに盛り上がりました。最後に役場の前のガジュマルの木の下で記念写真を行い、エクスカージョンは終了しました。

今回のエクスカージョンに参加し、普段実験室で藻類を扱っているだけでは触れることの少ない、フィールドに生きる藻類の魅力が改めて感じました。そして、この魅力ある藻類を失うことなく後世に伝えていくことは我々の大事な責務ではないかと思いました。最後になりましたが、解説と資料の準備をしてくださった先生方、このエクスカージョンの企画・準備・運営に尽力し、休日にもかかわらずお世話してくださった、那覇港管理組合堤敏郎常勤副管理者、沖縄総合事務局那覇港湾・空港整備事務所、八重瀬町役場の皆様、いであ株式会社、大会実行委員会の皆様に、心よりお礼申し上げます。

(京都大学大学院人間・環境学研究所)
写真提供：田端重夫 (いであ株式会社)



坂名城のタイドプールにおけるカサノリの観察風景



エクスカージョン参加者（八重瀬町役場前にて）